

小説

ゼンリツ戦争そして求春

稲瀬 隆

I 開戦

ぎやつー！ という霊長類共通のアラームがピンク一色の部屋に満ちた刹那、目の前にあった、象のように巨大な女の尻が宙を跳び、床に転げ落ちた。

「ジジイッ！おまえナニしたっ？！」

振り向く女の顔を見て、ボクも思わず絶叫した。

「◎☆@#——！」

ついさつき、前払いの二枚を受け取って媚びるような笑みを浮かべていたその顔が今、恐怖と怒りに満ちて目を剥き、口元からは真っ赤な血がしたり落ちていたのだ。

血尿！いや、血精？ きつと針生検の傷がまだ治ってい

ないのだ。そう察しつつ、ボクの意識はそんな三流ホラーの一場面から、少し前の記憶へとスリップした。

脳裏に浮かんだのはやはり怒りを孕んだ妻の顔だった。

「いやだっ。絶対にいやだ！ だいたいナンだよ、最後に、って。」

妻はボクの「最後の求愛」を言下に拒否した。ひと月ほど前の夜だ。前立腺ガンを宣告され、治療法の選択を迫られて、ボクがひどく追い詰められ、落ち込んでいた時だ。

『性か、死か』

ボクは本気で悩んでいた。当の本人以外には無価値で、

滑稽にさえ思われる命題かも知れないが、子宮ガンや乳ガンにも共通する重大な問題なんだとボクには思えた。性は立心偏に生と記すがごとく、命の源だ。性を啜う者には死が微笑む。聖・仏の世界はあの世なのだ。

大学病院でガン宣告された時、妻も同席はしていた。

「前立腺ガンは、早期であれば怖い病気じゃありません。

五年生存率もとても高い」

「私の場合はどうでしょうか」

「詳しく検査しなければ断定できませんが、PSAも決して高い方ではないし、悲観することはないと思います。」

初診の時、PSAはただのガンの目安で重症度とは関係ない、そう言ったのは先生、貴方ですよ！ そうは思いつつ、情けないことに人間、つい樂觀論に惹かれてしまう。

「色川さんはまだ五十歳代。お若いのだから完治を期して、全摘手術がよいと思いますよ」

前立腺の全摘！この一言に弾かれてボクの前頭前野に容赦なく打ち込まれたのは、以前、掛かりつけの羽仁医師からきいた悲惨な症例の一件だった。

去年の秋に遡る。

「色川さん、今回すこしPSAが高くなったかなあ。もう少し様子みて、更に上がるようなら泌尿器科を紹介しますよ。」

前立腺ガンの指標として年二回検査してきたPSAの値がその年、じわじわ上昇傾向にあった。こうなったら毎月測って追跡したいところだが、保険点数の制限でできないという。「次の血液検査は来年の春にしましょう。」

そして三月。

「PSA、徐々に上がってきましたね。あ、まだ泌尿器科ご紹介してませんでしたっけ？そろそろ一度、専門医に診てもらいましょう。」

少し啞然とするボクに向かってドクターは断定した。

「もし前立腺ガンだったら、全部取っちゃった方がいいですよ。変な未練を残さずにね！」

その頃はまだ、その「未練」が意味することの実感がなかった。TV番組や新聞健康欄では前立腺ガン治療の後遺症は、『男性機能の減退・喪失』および『尿漏れ』と上品に紹介される。とくに日常生活に支障が大きい後者の解説は詳細で、直後はひどいが骨盤底筋の訓練で次第に収まる、という。逆に詳述しにくい前者の解説は粗雑だ。だから実感が乏しい。羽仁医師の示唆に富んだエピソードも、笑っ

て聞き流す余裕があった。

「いや、2年前にね、全摘がイヤだつて逃げて、あちこち放射線で治療する病院探して処置した人がいたんだけど、結局1年ちよつとで亡くなつちやつてね。もう末期だったのに大変だったなあ。病室にこれ・」と彼は小指を立てた。「・がやつてきて、本人の枕もとで奥さんとバトルになつちやつて、もう」

顔をゆがめたその苦笑の意味も、その時のボクにはまだ遠い他人事のように思えた。男性機能の減退がただのEDなら、今は有効な治療薬がある。死亡のリスクと引き換えにするほどのこととは思えなかった。

だが悪夢のような現実突然、露わになった。脚本家の源香門が前立腺ガンを公表し、その時、後遺症情報が一気に全国区となったのだ。

「ボクは射精できなくなるんだそうです。神経も精液を貯める精囊も取ってしまうので。子供が欲しくなったら精子を直接取り出して、受精させることになるんですって。」

それは、単に『弱くなる』程度の事なんかじゃない。全くセックスできなくなる！起ちもしなけりや、感じもしなくなる、ということだ。始めも終わりもない。全てが失せ

る。なんということだ。悲劇だ。虐待だ。宮刑だ。尿漏れ臭ければまさに腐刑だ。

人間の『セックス』は、神が人類に与えた最高のコミュニケーション・ション手段だ。生まれた子が自立的に生存できるまで何年も、番（つがい）で育てねばならぬ人類が、特異に進化させた生物界でも稀有な能力なのだ。年に何度も受精の機会がありながら、メスがその機をオスに明示しない動物は人間くらいだという。人間のセックスは受胎のためではなく、人と人とが心身で繋がりを確かめ合う手段なのだ。視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚、五感の全てを駆使した交歓技法なのだ。それを放棄するなんて！

香門氏の報道からほどなく、あるドラマが主人公を前立腺ガンに仕立て、命と引き換えとなる摘出手術の提案に対して一言、こう言わせた。

「支障はないが、未練はある」

ドラマでは、術後『オカマ化』するかのよう不謹慎な表現もあったが、主人公のセリフはまさにボクの心境を突き、的を射ていた。

がん治療においてはどんな方法でも延命の保障はない。

原発巣の摘出が最も有効とはいえ、ミクロのレベルでも転

飛びつくようにつかんだバスタオルを体に巻いて、妻は怒鳴った。

「いや、ごめん、タオルをとりたくて・・・」

妻が浴室に入る直前、たまたま脱衣場のドアを開けたボクは、しどろもどろに弁解しつつ、完全に打ちのめされた。まるで出歯亀扱いだ。

誓っているが、結婚以来、女房と娘と母親以外の体軀には触れたこともない。自分でも貞淑を絵にかいたような夫だと思ってきた。それがこんなに汚らわしいもののように扱われてよいものか？ボクはこの人の何だったんだろう？

たまさか満員電車の中で女性の胸が腕に触れて怒鳴られた、哀れな中年男の心境を想像した。もし彼がイケメンの青年なら、笑って許されるだろうに。たとえブサイクでもボクは彼女の「正式な」夫なのだ。すべてを許しあつて結ばれたはずの仲なのだ。それが偶然、裸体を垣間見ただけで、あれほどに非難されるなんて。おむつを代えてやった娘が、たまたま着替に遭遇したボクを「いやらしい！」と睨みつけた、あの時よりはるかに衝撃は大きかった。子育てロスのすぐあとに、心理的妻ロスが襲ってきたわけだ。男の身体は生殖準備がひたすら蓄積されてゆく。女の身体が自律的に準備状態を廃棄・更新するのは全く違う。

移があれば再発は必至だ。前立腺と精囊をすべて取り払っても、すでに『目』に見えぬ転移があれば、程なく再発の憂き目を見る。そうなれば放射線やホルモンの治療が追加だ。要するに余命延長には保証はないが、失うものは百%確実だった。残された時間は長くない。そんな追い詰められた状況で、ボクは体に残る最後の記憶として妻を抱きかかいたと思った。だが、その願いは一言で粉碎された。

妻の『性』に対する拒絶反応は異常なほどだった。妻、冴のは旧姓は永井。その永井家の家風がそれほど極端な禁欲主義だったとも思えない。結婚当初は妻もまだ寛容だった。だが更年期からこつち、ほとんど憎悪にも似た反応となった。両親の性を知って嫌悪感を抱いた中学生のようにこれは男女を問わず、性行為が自分に関係ないと思うようになった人間の間感性的なのだろうか。

もう何年も、軽いキスさえも拒絶され、交歓の期待は裏切られた。この二十数年、肩をもむ以外、その体に触れたこともない。胸など触れようものなら、マンションの壁が壊れるほどの大音量で「バカ！なにをするの！！」と激怒された。当然ながら十年以上、妻の裸体を見ていない。

つい半年ほど前も・・・

「なにっ？やめてよ！いやらしいわね！」

だから男は自主的に排出する必要があるのだ。ボクも多くの男たちと同様、書面、画面の助けを借りることになった。スーパナベで固まりきららない溶き卵のように、気弱な怒りが頭の中を渦巻き、漂った。

浅い眠りの日々が続いて疲れが取れず、少々仕事にも差し障りが生じた頃、前立腺に針を刺して試料を取る検査入院の日がやってきた。ネットや身近の経験者が言う『痛くもなんともない』を信じて、なんの懼れも抱かずに入院した。だがこの針生検は、全摘手術を前にしてボクの身体を破壊した。最初の排尿時に出たスポンジのような肉片は医療ミスを疑わせた。痛みや血尿は事前の情報より遙かに長引き、「あるべき身体の反応」も大きく後退した。病気や手術の痛み、苦しみは、個人々々、ケースバイケースで全く異なることを実感したのだ。

ここにきて、重大な局面が迫っていることを思い知った。「仕事とセックスは家庭に持ち込まない！」以前、ボクの要求を断るとき、妻は冗談交じりにそう言った。もとネタはモリタの冗句だったが、今はその言葉に従おう。スーパナベで漂っていたさまざま、怒りに似た感情は、固い塊となって底に沈んだ。

そしてボクは『書』を捨てて街に出た。これは戦いだ。

II 膠着

「ゾウアザラシだった？ばかだね。ネットで探したの？個人でネット営業してるような女にカワイイ子がいるわけないっしょ。みんなお店に勤められない子たちなの。だいたいスゴイのが来るんだよ。写真とは全く別人。体重、年齢、スタイルはでっちあげ。むねとおしりと〇〇があること以外、すべてが違うんだって！」

行き付けビアバーの呑み仲間、小太りのホウさんがバカにしたように講義を始めた。ホウさんこと北条氏は同年齢だが、パチンコ、麻雀、競輪、競馬からゴルフまで、遊びには年季が入っている。

「だいたいこの頃、若いコたちってみんな可愛くなったじゃない？こつちも年取るとハードルがどんどん下がって、みんな可愛く見えちゃう。だから十人中九人は『可愛い』のよ。でもね、ネットで営業するコたちって、その残された一人が来るの。わかる？一〇人に一人、いやそれどころか二十人に一人、5%有意の選ばれた子たち。別の意味で“危険”率だね。」

この時、ホウさんを挟んで反対側のカウンター席にいた

か？」は不安なボク。

「一黒、二赤、三紫って知ってるか？」

「わーお、好色話ですねえ」ホウさんが喜ぶ。

「俺は黒かったのに、術後みたら赤いんだ。それも赤ん坊の肌のようなピンク色だ。全くパワーがなくなっちゃまった・・・」

その翌日、ガンの悪性度が分かった。最悪のスコアだ。早速、転移の有無を確認するため放射線の薬品を体に入れてがん細胞へのその集まり具合を見る、シンチグラムを撮影。その所要時間は当初予定を大幅に超えた。放射線技師がすまなそうにリクエストする。

「最後にもう一枚だけ撮りますね、ちよつと右肩を上げて・・・」

退室時にひよいと覗き込んだモニターには、肩の骨に黒々とした影が映っていた。心臓が小さく震えた。

手術日が決まった。なんと三週間も先だ。妻はいま我が家の主柱となり、家事を全うし、ボクにはこれまで以上に氣遣ってくれている。だがお互い、先日のことが気まずくて、体に触れるようなことは一切ない。生検後の血尿は治

白髪頭の通称へいさんこと辺戸氏が口を開いた。
「韓国がタイに行けばいい。むこうは・・・と、こちらを向き直って」ピックアップ方式だ。次々来るか、ずらつと並んだ中から選ぶ。いやならよそへ行けばいいんだ。」
「そこまで言う。またくるりと体を回し、ラグビー中継の方に向き直った。彼もこの店の常連で、ボクらより四、五才年長だ。
「オレも取られちゃう前に、行ったよ。」ぼつりと言う。
「えっ？へいさんも前立腺取ったの？」ホウさんが意外そうに聞くと
「ああ、四年前かな。」
「それで？今はなんともない？」
「PSAは正常に戻ったが、もう昔のオレじゃない」
「どういうことですか？」ボクも割り込んだ。
「チョロチョロもれは今も続くし、なによりナニがだめだ」
「だめ？」
「そう。硬くならない。そもそも術後、2センチ以上短くなったのには愕然とした。色まで変わったよ。」
「2センチはツライな」とホウさん。
「引き込んで膀胱とつながるからですね。色って何です

まりつつあったが、局所の感覚はおかしいままで、活動的にはなれず、気晴らしに散歩するのも億劫だった。ボクは次第に、無理を重ねて疲労する妻と前立腺ガンからの心理的圧迫でいたたまれなくなった。

「ちよつと飲んでくる」

「お酒なんか飲んでいいの？」

「検査入院おわつてから一週間だ。退院時にも確認したけど、問題はないはず・・・」

ボクは、不安と不満を顔に浮かべた妻に見送られ、ビアバーに来た。

「洋ちゃんさあ、そんなふさぎ込んでるとガンに命を喰われちゃうよ。」ホウさんが心配してくれる。ボクを挟んでへいさんは、

「前立腺ガンだってナメちゃいけない。転移は手術で取って診なけりや分らない。気を抜かないで戦わなくちゃ。」と、脅しとも、励ましともとれることをいう。するとホウさん、

「いっそのこと、みんなでタイ、行かない？二泊三日の弾丸ツアー。」

不意を突かれて、返答につまるボクの横から、

が差し込まれていて哀れで痛々しい。

それから毎日、妻は見舞いに来てくれた。病院契約のアメニティセットでは不十分な、あれやこれやの品物をあちこち探し回って買い求め、運んでくるのである。その献身ぶりには、惚れ直す、というより、心底感謝で頭が下がる思いだった。

病室にも夜は来る。だがそこに静寂の闇はない。廊下からは薄明かりが漏れ、バイタルのアラームが頻繁に鳴る。そして巡回のナースが点滴のチェックに来る。浅い眠りからひとたび覚めると目が冴える。家の事、仕事の事、いろいろ思い巡る中で時折、ふとバンコクの夜の光景が脳裏に浮かぶ。浮かびはするのだが、しかし、どうにも曖昧で現実の記憶とも思えない。根拠不明のランキングでグループ分けされ、ずらつとひな壇に並んだ美女たち。客の好みとマッチングするやり手婆の「コンシエルジェ」。そして二人でエレベータに乗って・・・？だが、これは『予習』で見たインターネット映像では？

日本人専用のバーに行ったような気もする。熱い視線を送ってくる中から笑顔が魅力的でグラマラスな子を選んで

「唐突、ですなあ」とへいさん。「とはいえ、この梅雨空の下で気を病んでるより、いっそ『今生の名残』を仏教の国タイで納めてくるってのは良いかもしれんね、これからの闘病には」

その翌週末、われら三人の不良高齢者は日本を後にした。妻には「北海道」にまた例の連中と釣りに行く、と言った。もちろんウソだ。こんな危険なウソははじめてだった。

III 終戦

手術支援ロボット ダ・ヴィンチによる摘出手術は三時間半ほど。頭を低く仰向けで深く眠らされている間に終わった。ただ、二酸化炭素ガスが吹き込まれたせいとか、そもそも腹の中から臓器を一つ取り除く大改造をしたせいとか、腰の鈍痛と腹部の不快感がひどく、夕暮れのベッドで目覚めた。誰にも助けを頼めぬまま必死にリモコンを手繰り寄せ、四苦八苦しながら電動ベッドを操作して体位を変え、苦痛をなだめた。その時はじめて我が身の現状に気がついた。両手と体躯には計四本のチューブが繋がれ、腹部には七つの穴が開いている。修理中のアトムのような、なんと不思議な気がした。可哀想な我が分身は、太いチューブ

脇に呼び、二杯目の水割りを飲んだあたりから記憶が怪しい。片言の日本語・英語会話での美女との絡みも、あったような、なかったような。むしろ、ぼんやりした暗闇の中で、妙にはつきり脳裏に蘇ったのは、ホウさん、へいさんとの会話だった。

「エイズに罹るのがこわくて女を買わない？ そんなこの辺のしつかりした店じゃ、まず心配ないよ。それでもこわい？ じゃあさ、牡蠣に中るのが怖くてカキフライも食べない？ 寄生虫が怖くてマス寿司、しめサバ、イカ刺し食べない？ 落ちるの怖くて飛行機乗らない？」

ホウさんが持論を語る。へいさんが先を続けた。「世の中、あらゆるリスクがゼロにはならない。リスクを小さくする知恵、働かせて、メリットを取る。こちらの屋台では、焼き物は食べても生ものは食べない。生ものはホテルやレストランで食べる。それと同じ」

「洋ちゃんさあ、ここまで来て、行かない、なんてないんじゃないかなあ。へいさんなんか、ナニが困難なのに君に付き合っ来てるんだぜ。」

「オレはタイの宮廷料理が喰いたくて来てるんだ。気にするな」

北海道行きの偽装工作は、あつけなく暴かれた。ヘイさんが気を利かせて買ってきてくれた北海道土産には、ビニール袋の封にアンテナショップ店名入りのマスキングテープが貼られていたのだ。

妻の詰問が始まった。

「本当はどこに行ったの？ なに黙ってるのよ？ 隠れてじゃないと行けないようなところ？」

「いや、別にその普通の、あの、ここ病室だしさ・・・」

「あ、そう、言えないようなところ行ったんだ。いやらしいところ行ったんだ！」

「別にいいだろう、お前とはもう男と女じゃないんだし。求めてもお前がくれないものを、外で求めたんだよ。おれは仙人じゃないし、坊主でもない。ましてこの世で最後の思ひ出を、お前に拒否されたから外で作ろうとしたんだよ。」

「お前、お前 言わないで！！わたしは呀！お前っていう名前じゃない！！」

「ほうらな、その年になっても自我形成期の一人称に固執している。無名の二人称で呼び合う夫婦仲になれないんだ。世界観が自己中で、自分を捧げる愛なんて考えられないん

だ。」

「簡単に愛、愛って言わないでよ！」

「大事なことだろ？言わなきゃ分からないだろ。」

「だったら言つてよ。愛してる、なんてこの何十年もあなだから言われたことない。」

「お前からだって、言われたことない。」

「お前って言いな！」

「お前はお前だ！お前だって結婚前からも一度も言つてくれたことないだろ。」

「いまさらなに言つてるの！こうして三十年、ずうっと貴方を支えてきた。ずうつとよ、今も同じ。それが愛じやなくてなんなのよ。これが私の愛の形なのよ。そんなこと言わなくても分かつてよ！」

「矛盾したこと言いな！」

「女に矛盾なんて言葉、意味がないの！」

「・・・」

「だから、死なないで、絶対に。お願い・・・」涙声だった。

男として人生最後の戦いも、妻の勝利に終わった。